2015年　2月　JBBF国内宣教委員会　機関誌　第66号

かいたく

教会のない地域に教会を　刈り入れ場に働き人を



国内宣教カンファレンス／女性･グループ ディスカッション

あなたがたは、すべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちから出てあなたがたの間にある愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富むようになってください。こうは言っても、私は命令するのではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の真実を確かめたいのです。

（Ⅱコリント八章七～八節）

どの時代も困難はあったと思いますし、たましいの実りが少ないのは日本に限ったことではありません。また、私たちはキリストのためにあえて困難を甘んじて受け入れ献身しました。ですから、言い訳は消しましょう。しかし、私たちには主イエス様が弟子たちを愛し、祈り、励ましてくださったように、お互いが励まし合うことが必要です。

今年も年始に国内宣教カンファレンスが開催され、八十一名（男性三十一名、女性三十名、子供二十名）が集い、近松師を通して語られる力強いメッセージに心打たれ、今回初めて取り入れられた婦人集会では、婦人たちの働きに合った講義と交わりがありました。

国内宣教カンファレンス、それは互いに励まし合い、愛し合い、福音の前進を祈り合う場所でありたいと願っています。

（JBBF国内宣教委員会委員長・榎本昌博）

2015年　国内宣教カンファレンス

キリストの教会

～愛のうちに建てあげる～



2015年1月5日から6日、浜松市の開春楼で国内宣教カンファランスが開かれました。3回の集会に加え、女性集会や子供集会そして分科会と盛りだくさんのプログラムでした。以下、近松先生のメッセージ内容の報告、3人の女性伝道者が担当してくださった女性集会の報告、そして参加者の証しを掲載いたします。

第一集会

京都教会が建て上げられてきた経緯を抜きにして、今回、御言葉を語ることは出来ないのではないかと考えます。私たちの教会は初めからＪＢＢＦに加わっていた訳ではありませんでした。設立者の三郎牧師が京都で伝道を始めたころ、他教派の教会で協力牧師として働き、京都の教区主事を務めていました。しかし、その教派の信仰的立場に疑問をもち、働きを降りて独立伝道を始めるようになりました。当時、牧師はさまざまな教派教団の人々と関わりを持ちつつ、その中で自身の信仰の立ち位置を見つめようとしていたようです。御言葉を通し、また人との交わりを通して自分の信仰を見つめなおすことは大切です。伝道者は多くの場合、一度伝道を始めると、救霊と教会の建て上げに力を注ぐあまり、自分の信仰の立ち位置を確認することが疎かになりがちです。その結果、知らず知らずのうちに、この世に迎合した伝道や教会形成をしてしまうことがあり得ます。伝道者は常に御言葉に固く立たなければなりません。さもなくば人間的、肉的なメッセージを語ることになります。説教者は神の代弁者として神の言葉を託されていることに恐れを持っていなければなりません。

ＪＢＢＦに加わったきっかけは、天利操先生を通してラージャス先生を紹介されたことでした。何回となく繰り返された学びや交わりの中で、この信仰こそ正しい聖書信仰であると確信を得ました。そして、牧師はじめ教会員全員が再浸礼を受け、あらためて聖書バプテスト教会として再出発したのでした。この決断こそが京都聖書バプテスト教会が建て上げられた信仰の原点です。

ある時、ホワイト先生が三郎牧師のことを「変わり者」と言われたことがありました。それは好意的な言葉でした。周りの人たちは変わり者をなかなか受け入れることが出来ません。しかし、しっかり御言葉に立って信念を曲げなければ、周りは次第に受け入れていくようになります。伝道者は御言葉を取り次ぎ、御言葉によって人々に悔い改めをうながします。そのために、まず説教者自身が御言葉に固く立つと共に、悔い改めが求められているはずです。自らが惑わす者となってはなりません。ベレヤの人々は毎日熱心に聖書を調べました。また第一テサロニケ五章二一節にあるように、すべてのものを識別して、良いものを守らなければなりません。悪の働きかけは非常に強く、力があります。長い歴史のある教会でも、瞬く間に道をそれて行くこともあります。御言葉にしっかり立つことで教会は建て上げられてきたと考えます。



第二集会

エペソ一章十節に「時が満ちるに及んで」とあります。聖書には何回も「時」という言葉が出て来ます。伝道の書三章には、あらゆることに時があると語られています。神の御計画の中で時が定められているということです。それは人生一般のことだけでなく、伝道についても言えることです。京都教会は人間の側の計画を越えて、神の時が備えられ、建て上げられてきたと言えます。

教会の歴史をいくつかの時代区分に分けるならば、第一の区分は、設立当初の１９５０年代になります。当時、戦後すぐの時代であり社会は貧しく、教会も大変貧しいものでした。しかし、教会は懸命に伝道に励みました。第二の区分は、１９６０年から８０年代です。社会は戦後の混乱期から脱し、オリンピック景気に沸いていました。教会は京都市南区での開拓伝道を10年行った後、新しい開拓地を探し求めました。そして現在の山科区に移転しました。閉鎖的な地域でしたが、積極的に外へ外へと伝道が繰り広げられていき、多くの人が救われ、教会に加えられ、献身者が起こされ、新しく開拓が始められるようになりました。しかし、ある意味で教会が揺れ動いた時期でもありました。三郎牧師が怪我によって入院し、伝道からの長期離脱を余儀なくされました。教会が祝福される時、サタンも働いています。第三の区分は、８０年代終わりから９０年代終わりにかけてです。それは山科での新しい会堂での歩みでした。三郎牧師が病床で与えられた新会堂のビジョンが１０年かけて実現した時期でした。最後に第四番目の区分ですが、これは９０年代終わりから現代に

まで至ります。牧師交代とその後の歩みです。私が99年11月に按手礼を受けた一か月後の12月、三郎牧師の癌が見つかり、入院三か月後に召されました。神から委ねられていた働きを終えて主のもとへ凱旋しました。

京都教会の歩みを振り返ってみますとすべて神が最善の時を備えてくださったと言うことができます。しかし大切なことは、神の備えておられる時を「待つ」だけではいけないということです。祈りをもって主の導きを求めなければなりません。そしてその祈りは伝道者だけではなく、教会の一致した祈りでなければならず、牧会者はその先頭に立って祈りの模範とならなければなりません。三郎牧師はまさに祈りの人でした。時には喘ぎをもって、時には賛美をもってよく祈りました。私たちは祈りによって主の導きや示されたことがあれば、決断しなければなりません。時にはこれまで積み重ねてきたものを捨てることを求められるかもしれません。しかし、祈りにおいて決断したならば、ルカ九章六二節にあるように、手を鍬にかけてから振り返ってはなりません。

京都教会は山科に移る時、大きな決断が必要でした。これまで建て上げてきた伝道をいったんリセットしなければならなかったからです。しかしこの決断によって豊かな祝福を与えられたのでした。何一つ犠牲を払うことなく教会を建て上げていくことは出来ません。神は私たちに大いなるものを与えようとされています。それを求めなければなりません。求めないならば与えられません。神の祝福をおろかにも見過ごすことがあってはならないのです。

第三集会

ヤコブ書三章一節には「わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの者は、教師にならないがよい。わたしたち教師が、他の人たちよりも、もっときびしいさばきを受けることが、よくわかっているからである」とあります。説教者は自分自身が確信し、そして実践していることを語らなければなりません。その意味で一番語りにくいのは自分に足りないところです。私にとっては「神の愛」「キリストの愛」でしょうか。神が愛してくださっている事は認めざるを得ません。しかし、一方的な愛を受けた者として、その愛を実践しているのだろうかと自問します。第一ヨハネで語られる「愛」は心に迫ってきます。第一コリント十二章三一節でパウロは語っています。「そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう」。その「道」とは何でしょうか。それは続く十三章で記されています。「もし愛がなければ、いっさいは無益である」。もし愛がなければ働きは律法的になり、自己満足に過ぎなくなります。もし教会や伝道者が愛の実を結ぶことができなければ、世の人々は教会やクリスチャンたちをどう見るでしょうか。

さて、教会とはパウロの言葉によればキリストのからだです。キリストのからだに与えられている賜物を生かしていく時に、教会は建て上げられていきます。実は京都教会ではトラクトを年に3万枚近く配布しています。この働きによる来会者の数は少ないですが、しかし、例えば訪問伝道などと違い、誰でも参加することができます。キリストのからだを構成する一人ひとりが教会を思い、伝道に加わる恵みに与ることが出来る伝道方法です。

献身された神学生は当然のこととして教会のことをいつも考えて欲しいと願います。神学校の標語は「学ぶために入り仕えるために出ていく」です。時には涙を流すような真剣な訓練を受けていただきたい。「教会で奉仕をしているときに召されても良い」という思いを持つほどであってほしいと考えます。私たち伝道者は献身した時、すべてを委ねたはずです。無から有を生み出すお方に、私たちを召し出してくださったお方に対し、信仰を持って仕えて行くべきです。

使徒十八章から二十章において、パウロとエペソ教会の関わりが記されています。パウロのエペソ教会との関わりの初めは、コリントから向かった十八章十八節以降に記されています。ここではユダヤ人たちと論じましたが、程なくエペソを去ります。その時「神のみこころならまたあなたがたのところに帰ってこよう」と言って別れ、その約束は十九章一節で果たされます。3年間滞在したエペソでの伝道については十九章八節以降に記されており、その後パウロはエペソを去りますが、エペソ教会の熱い思いが二十章十七節以降三八節までに記されています。各地で迫害を受けてきたパウロの働きは、ここエペソでも同じであり、困難を覚えつつも伝道に励んでいたことが分かります。その働きの根底には「しかしわたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜った、神のめぐみの福音をあかしする任務を果たし得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」（二十章二四節）という愛に基づく信仰がありました。現代は福音を語ることによって投獄されることはないでしょう。しかし、さまざまな形で伝道に対する反対が起こっていることは同じです。尊い主の働きに召し出されている私たち伝道者こそ、このパウロの言葉にアーメンと言えるようでありたいと考えます。その時、教会は愛によって建て上げられていくのではないでしょうか。



Women's meeting

婦人集会で教えられたこと



今年の国内宣教カンファレンスでは、婦人集会を準備していただき、女性の先生方からのお証を通して学ばせていただく幸いな時を持たせていただきました。以下に3回のお話の概要を記します。

要約＝峯川紗也子（徳島聖書バプテスト教会神学生）



ルツ・キング先生
高槻聖書
バプテスト教会

第一婦人集会

神様が導いておられるなら私たちの召しに関わらず、次世代にキリストを伝えることは私たちの責任であり特権です。誰かの真似をする必要はありません。神様は、私たちに必要な才能や賜物をくださいました。私たちの強さも弱さも使いたいからこのポジションに置かれたのです。子ども伝道は教会の未来であり、委ねられた責任です。何よりも開拓伝道の大変さの中で、自分の子どもへの信仰継承を決して忘れてはなりません（マタイ十八章二～五節、申命記四章九節）。しかし、間違ったプレッシャーを与えないように気をつける必要があります。本当に自分が罪人であることがわからなければ救われることは難しいのです。自分の町を見渡した時、どれぐらいの人々がイエス様を知らずに生活しているでしょうか。私たちは同情心を持って祈り神様からの知恵と力をもらう必要があるのです（Ⅰテモテ四章二節）。





近松昭江先生
京都聖書
バプテスト教会

第二婦人集会

子どもを育てていく上で大切なのは祈りと御言葉です。人生には選択しなければならない時があります。そんな時、中心がぶれないように最高の育児書である聖書に頼ることが大切です。神様は何でもご存知のお方で、その時々において必要なものを必要な分だけ備えてくださいます。教会にとって困難や試練も、神様のご計画のうちにあると信じています。子どもを育てていく上で本当に祈りは大切です。大切な三つの要素として、まず子どもに対しての夫婦の継続した祈りです。二番目に、祈っていることを子どもに知らせることです。三番目に、子どもに祈る必要を教えることです。これらのことを神様が用いてくださり、御言葉をもって導いてくださいます。神様から与えられた子どもを、神様にお返しするまで手を放すことなく、目を放すことなくさらに主に求めつつ育てていかれることを願います（ローマ八章二八節）。



斉藤友子先生
東京聖書
バプテスト教会

第三婦人集会

アメリカのクラスで学んだことが、今も日々の伝道者生活の土台となっています。まず「自分自身について」です。牧師夫人の働きは簡単ではありません。私たちが、牧師夫人であることを喜びと捉えることが大事です。大切なのは、ありのままの自分であること、よく主とつながっていることです。私たちの健康面、精神面は家庭や教会にも影響します。自分のために定期的な休息をとることはとても大切です。神様も休まれたのです。二番目に「自分の家族について」です。聖書で、妻は夫の助け手であると言っています。夫が良い決心をできるように祈ること、夫に質問し、よく話を聞くことが大切です。そして、子どもと一緒に聖書を読み、祈ること、それを続けることが大切です。三番目に「主の働きについて」です。自分のために聖書を読み、御言葉に教えられることが大切です。行動の秘訣は、キリストに対する全き献身です（ピリピ一章六節）。積極的に教会の霊的祝福に関心を持ち、いつも祈り、夫の働きを励ます姿勢が必要です。教会の人々を愛し教え、教えられることも大切です。

婦人集会で特に教えられたことがあります。神様は、ありのままの私を用いてくださるということです。私はまだ経験も少なく訓練が必要な者ですが、どんな時も主に期待し、神様の愛のうちに生きる伝道者でありたいと思わされました。

末筆になりますが、貴重な時をくださった神様と多くの準備をしてくださった先生方に感謝致します。

Men's sub-working groups

男性分科会報告

今回は各分科会での講師は立てず、司会者のリードによって自由な話し合いの時間といたしました。
以下、簡単にですがどのようなことが話し合われたかご報告いたします。

1:家庭と心身の健康

どのようにストレスを解消するのか、牧師家庭の子供をどう育てまた教会との関係でどう接するべきなのか、外国の方や性同一性障害の方をどのように教会にお迎えできるのか、経済的な必要をどう考えるか、などについて話し合われました。



2:伝道者(セカンドマン)の働き

牧師との距離感やコミュニケーションの問題、将来の牧師候補としてかそれとも開拓伝道に出る備えをしているかという立ち位置の問題、「セカンド」であってもいつでも「ファースト」になれる心構えの重要性、などについて話し合われました。

3 学び·研鑽の情報交換

伝道牧会で直面している課題についての取り組みが主に語られました。繁栄の神学の問題や翻訳の問題、そして信徒がいかに主体的な聖書の読み手となれるかについても話し合われました。



4 牧会と説教及び交わり

召された者として説教にあたることの大切さ、会衆制と教会の一致の問題、他教会·他教派から会員になられた方との関わり、そして参加者各自の経験などが語り合われました。

5 地域社会·他教会との関わり

ここでは主に地域社会との関わりについて語られました。参加者それぞれが置かれている状況を分かち合いました。新しい働き場での葛藤と祝福、日本古来の文化が強い地域での困難さ、教会と地域福祉との関わりなどが語り合われました。



女性グループ ディスカッション





子どもクラス

国内宣教カンファレンスに参加して



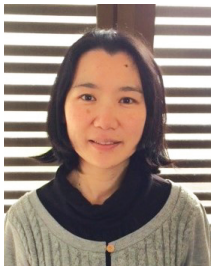
濱谷勉先生
瀬戸聖書
バプテスト教会
牧師

私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせその徳を高め、その人の益となるようにすべきです。〈ローマ十五章二節〉

私が伝道を始めて間もないころ、母教会の牧師から次のような助言がありました。「この群れのいろいろな集まりに、努力を払って出席しなさい」。バイトを休んだりしながら、いろいろな集会に参加することは、それなりに大変な面がありましたが、必ず、そこに得るものがありました。そして今、自分が少し心がけていることは、自分の損得ばかり考えないで、参加することで仲間を少しでも励ますことが出来たらいいなと言うことです。このことは、群れの何人かの先生から教えられたことでもあります。

国内宣教カンファレンスに、独立教会の先生方の参加が少ないとの声を聞きます。確かに皆さん忙しいのですから、分かります。しかし、自分の益だけではなく、仲間を慰め、励ます心を持って参加されるとすばらしいことが起きると信じます。

今回、三回のメイン集会、分科会、先生方との交流はなかなか刺激的でした。また、宣教委員会の配慮で女性だけの集いが持たれたことは画期的で良かったと思います。委員会からいつもより多額の支援がなされたと聞きますが、活きたお金の使い方がなされて結構なことです。開催の御労ありがとうございました。



澤のぞみ先生
岡山聖書
バプテスト教会
伝道師夫人

主イエス様の御名を心より賛美いたします。カンファレンスの恵みを証しさせていただきます。小さな集まりに慣れて大きな集まりに行くことに消極的になっていましたが、委員の先生方のお計らいにより、十数年振りに参加させていただき期待する以上の恵みを受けました。心から感謝いたします。

近松先生を通して、時を見過ごしてはいないか、時をただ待っているのではなく、時を祈り備えることの大切さを教えていただきました。女性の集会では、先生方のお証しを通して、子どもを主に導くことの大切さ、人と比べずに与えられた賜物を用いてお仕えすることの大切さ等を教えていただきました。

一年の初めに、幸いな集会とお交わりそして主のみ教えと恵みをいただいて、岡山に帰ってきました。現実の生活、働きが始まりました。ここでまた、主に従い励んで行きたいと思っております。



栢下基従先生
検見川聖書
バプテスト教会
伝道師

カンファレンスは近松満先生からのメッセージと諸先生方とのお交わりを通して、多くの恵みをいただき感謝でした。第二集会では神様の「時」について語られました。伝道者の書三章十一節に「神のなさることは時にかなって美しい」とありますが、私たちはその「時」をただ待っていれば良いのではなく、その時を求めるべきであると語られました。それは伝道者個人の祈りではなく、教会の一致した祈りであるべきであることを教えられました。求めていないことで神様の「時」を見逃していないか、与えられる機会を逃していないか、考えさせられました。

私は神学校卒業後、一ヶ月で教会の責任を担う立場とされました。決して自分の願っている「時」ではありません。大きな問題に直面する度に、献身者でありながら、被害者意識を覚えることがありました。しかし、祈りを通して、その「時」が「神様がなさること」と確信を得ることで前進することが出来ます。そして、振り返ればすべてが「美しい」と主を賛美する者でありたいと思います。

国内宣教カンファレンス　会計報告

いつも国内宣教委員会の働きのためにお祈りくださり、献金をおささげくださり、心より感謝いたします。左表は今年1月に行われましたカンファレンスの会計報告です。今回は初の試みとしてできるだけ多くの方の参加を願い、参加費の全額補助をご案内いたしました。感謝なことに多くの方がご利用され、参加者も増え、交わり豊かな集いとなりました。長年積み重ねられたささげものがあったからこそ実現したことでした。あらためて感謝申し上げます。できましたら次回も参加費全額補助をと願っています。お祈りに覚え、おささげいただければ感謝です。送り先は左記の通りです。

! 来年の開催のためにぜひご協力ください。「カンファレンス指定」とご記入ください。

献金振込先（郵便振込）
００１４０-２-６５４３７５
ＪＢＢＦ国内宣教委員会

収　入		支　出	
参加費	¥205,900	開春楼（宿泊費・朝食代・会場費）	¥284,080
集会献金・献金箱	¥80,510	講師謝礼	¥65,000
基金会計より繰入	¥474,456	講師交通費	¥59,000
		講師接待費	¥9,780
		参加費補助	¥136,800
		交通費補助	¥172,340
		その他雑費	¥3,262
		弁当・飲み物	¥30,604
収入合計	¥760,866	支出合計	¥760,866

かいたく　2015年2月発行　第66号　発行元:JBBF国内宣教委員会　長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696−27　編集責任:榎本 昌博　デザイン:疋田 健次